

薬学部一回生に対するヒューマニズム・コミュニケーション演習の新たな取り組み

A new approach of participatory learning for “humanism & communication” for freshmen.

富山直樹^{*1} 川田睦子^{*1} 鈴木健二^{*1} 土屋友房^{*1} 浅野真司

Naoki Tomiyama^{*1} Mutsuko Kawada^{*1} Kenji Suzuki^{*1} Tomofusa Tsuchiya^{*1} Shinji Asano^{*1}

キーワード；コミュニケーション 参加型学習 模擬患者

Keywords ; communication, participatory learning, simulated patient

要旨；薬学部1回生対象科目として参加型のヒューマニズム・コミュニケーション演習を実施した。コミュニケーションの基本的な技法を学び、ロールプレイで実践し、グループ討論を行った。それらの集大成として、薬局での患者対応という医療コミュニケーションに反映させて演習した。各演習には教員に加えて薬学部の6回生（PhA: Pharm. Assistant）をチューターとした。薬局での患者対応の演習では、模擬患者（SP）も加わりフィードバックを行った。演習を通じて多くの学生にコミュニケーションへの抵抗感がなくなり、主観的な成長感、客観的な上達が確認できた。受講学生からは、演習に6回生のPhAやSPが参加することに対して、学習効果の向上に繋がるという肯定的な意見が得られた。

Abstract ; We newly introduced a participatory learning program in the practice of humanism & communication for freshmen of our department of pharmacy. In this program, the freshmen studied several basic vocal and non-vocal techniques for communication, practiced them by roll-play, and discussed their performance in the small groups. Finally, the freshmen practiced communication in the performance of “first interview to patient in pharmacy”. In the “first interview to patient in pharmacy”, our simulated patients (SPs) joined the roll-play, and gave their feed-back comments. Senior 6th grade students also joined the session as facilitators. In this participatory learning program, the freshmen recognized the importance of communication, overcame their antipathetic feeling against communication, and acquired the feeling of their own growth. Thus, participation of SPs as well as senior students (PhAs, Pharm. Assistants) in the participatory learning program seems to have a positive impact on the communication study.

所属：立命館大学薬学部

^{*1} College of Pharmaceutical Sciences, Ritsumeikan University

緒言

薬学6年制教育の中における対患者、対他職種の情報収集、情報提供などコミュニケーションの重要性が指摘されている。先ごろコアカリキュラムの改訂に先立って纏められた「薬剤師として求められる基本的な資質」の中でも、項目の一つとして「コミュニケーション能力」が挙げられており、6年生卒業時に求められる資質・能力として「患者・生活者、他職種から情報を適切に収集し、これらの人々に有益な情報を提供するための能力を有する」ことが求められている¹⁾。

一方、学生にとっては、高等学校までは、同級生、友達など均質化した集団の中にあり、コミュニケーションをとるべき対象も限定されている。さらに電子メールなどの媒体を通じたコミュニケーションの比重が増し、生身の対人コミュニケーションが敬遠される傾向も強い。現実にはネットやメールの中に生き、実社会に十分に適応できない要支援学生も増えている。また、核家族化や地域社会の絆の希薄化が進み、異なる世代との日常的なコミュニケーションの機会もめっきりと減っている。さらに、薬学部への進学を目指す学生層には、人文社会系と比較して対人コミュ

ニケーションを得意とする者は少ない。むしろ、学生にとっては、薬学部で必要とされる資質として「コミュニケーション能力」があること自体が意外なことかも知れない。未だに「コミュニケーションが不得手故に、薬学部を志望した」という学生も少なくないと考えられる。こうした薬剤師に求められる資質と、初年次の薬学部生のギャップを見る時、6年間でいかに学生の「コミュニケーション能力」を涵養するかは非常に大きな問題である。特に6年の第一歩となる一回生への教育は重要と思われる。

今回、私達は、薬学部のカリキュラム改革に先行する形で、初年次の薬学部教育として1回生（107名）を対象に、新たに「ヒューマニズム・コミュニケーション演習」を開講し、主にコミュニケーション課題のロールプレイやスモールグループ・ディスカッション（SGD）、マイクロプレゼンテーションなどを組み込んで実施した。Fig. 1 に本授業の現行の6年制のカリキュラムの中での位置づけを「順次性のある螺旋型カリキュラム」として示した。授業の経過を追って、授業開始時・中間・終了時に、自己の成長や気づきについて振り返りレポートさせることで授業の効果

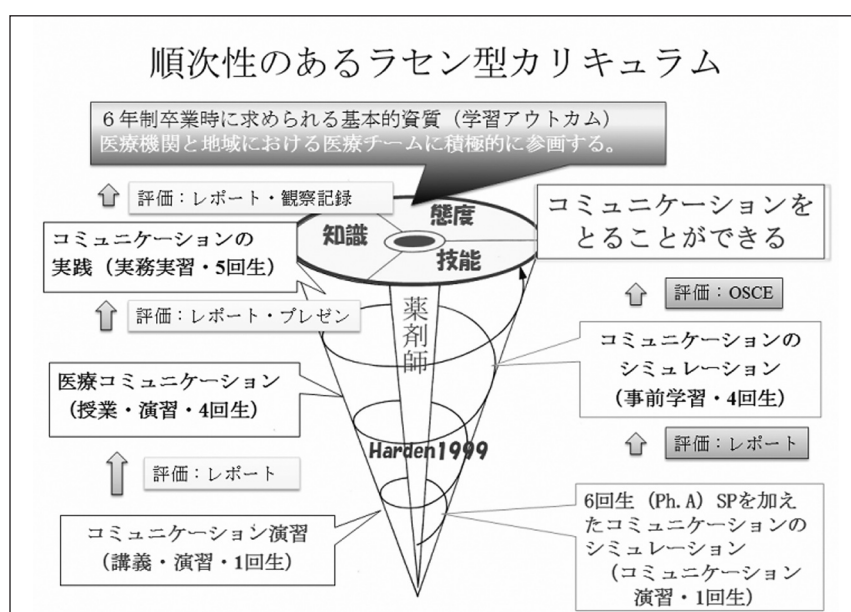


Fig. 1 薬学6年制カリキュラムにおける低回生コミュニケーション演習の位置づけ

Table 1 演習の各回授業内容とキーワード

第1回	イントロダクション「ヒューマニズム・コミュニケーションへの誘い」 授業の到達目標、各回の授業概要、成績評価方法、コースツールの使用法など
第2回	ヒューマニズム・コミュニケーションの為の基礎知識(1) 医療におけるコミュニケーションの重要性とその実践例
第3回	ヒューマニズム・コミュニケーションの技法(1) 聴き手に求められる力／オーディエンス教育
第4回	ヒューマニズム・コミュニケーションの技法(2) 受容的に聴く力／犬バラ法
第5回	ヒューマニズム・コミュニケーションの為の基礎知識(2) ゲストスピーカーによるレクチャー：「生存学」
第6回	ヒューマニズム・コミュニケーションの為の基礎知識(3) 「生存学」をめぐるスモールグループ・ディスカッション
第7回	ヒューマニズム・コミュニケーションの技法(3) 相手の立場に立って情報を伝える力／トラストワーク
第8回	ヒューマニズム・コミュニケーションの技法(4) トラストワークの振り返り医療における「相手の立場に立って情報を伝えること」とは
第9回	これまでの振り返りと中間まとめ ヒューマニズム・コミュニケーションについての気づきと難しさ
第10回	ヒューマニズム・コミュニケーションの技法(5) 的確な指示を行う力／図形カード並べ
第11回	ヒューマニズム・コミュニケーションの技法(6) 相手の気持ちになって話す力／アサーション
第12回	ヒューマニズム・コミュニケーションの技法(7) 医療におけるコミュニケーションの必要性
第13回	ヒューマニズム・コミュニケーションの技法(8) ロールプレイ「薬局における患者対応」
第14回	ヒューマニズム・コミュニケーションの技法(9) ロールプレイ「薬局における患者対応」
第15回	まとめとマイクロプレゼンテーション 本授業を通じて身につけた知識・技能・態度についての発表

を検証した。

また、これとは別に、次世代を担う人材（後輩）を育成する意欲に溢れた6回生をチューターとして加え、実務実習での経験、成果や気づきを1回生に直に伝えると共に、6回生自身が低回生を教えることを通じて自ら学ぶということを促した。さらに、コミュニケーション教育への標準模擬患者（SP）の参画が有用とされている²⁾ことから、共用試験OSCEにおいてSPをお願いしている地域ボランティアの方々15名にもチューター的な役割や、SP役として参加していただいた。

方法：

薬学部1回生全員（107名）を対象に、前期科目として、1回の授業時間が90分で全15回から成る「ヒューマニズム・コミュニケーション演習」を実施した。各回の授業内容、キーワードをTable 1に示す。授業における到達目標としては、①「言語的および非言語的コミュニケーションの方法を概説できる」（知識・理解）②「人の加齢や死のもつ意味の多面性をふまえ、意見を述べることができる」（思考・判断）③「コミュニケーションを円滑にするための話し方・聴き方や文章作成等の基本的な方法を実践できる」（技能・

表現) ④「患者の気持ちに配慮した双方向的なコミュニケーションが行える」(技能・表現) ⑤「自らの体験を振り返りながら、生命の尊さと医療の関わりについて自分の考えを持とうとする」(関心・意欲・態度)の5点を掲げ、シラバスに公開するとともに、初回の授業において学生に説明を行った。

各回の演習は、初回の全体説明やヒューマニズム(「生存学」)についての講演の場合を除き、107名を3つのクラス(A、B、C)のクラスに分けて実施した。各クラスは、教員2名(1名は学内の教育開発推進機構に所属し、教育学や心理学を専門とする教員、または薬学部の非常勤講師で臨床心理士。もう1名は薬学部の専任教員)、PhA(薬学部6年生:学内で大学院生のTAと区別する意味でPharm. Assistantという制度を作った)2名の体制をとった。医療コミュニケーションでは各クラスにSPが3~4名が加わった。(SPはOSCEにおいて標準模擬患者をお願いしているボランティアで、月例のSP講習会に2年以上参加されている方とした。)SPには事前に説明会を実施し、本演習授業の趣旨や進め方について意見交換を行った。グループワークやSGDでは、教員やPhA、あるいはSPがチューター的な役割を担った。

演習全体は、2回目の授業の中で医療におけるコミュニケーションの重要性とその実践例を紹介した後、前後のプログラムから構成した。前半のプログラムでは、医療に特化することなく傾聴や共感の姿勢、相手の立場に立った情報発信などを学ぶために、一般的なコミュニケーション技法を用いた演習を行った。Table 1に示される「オーディエンス教育」、「犬バラ法」はそれぞれ聴き手に求められる力、受容的に聴く力を意識して身につけることを、「トラストウォーク」、「図形カード並べ」はそれぞれ相手の立場に立って情報を伝える力、的確な指示を行う力を意識して身につけることを、「アサーション」は相手

の気持ちになって話す力を意識して身につけることを目的として開発されたテーマ教材であり、すでに立命館大学で初年次教育や、教員向けのFDプログラムとして利用されているものを用いた³⁾。

後半のプログラムでは、薬局における患者対応、情報収集という課題を通じて、前半の授業で学んだコミュニケーション技法を実践することとした。この実践には実務実習に向けての事前学習で行われている「薬局での患者対応」の課題を3~4分程度に短縮・簡略した初回面談・患者対応のシナリオを新たに作成し使用した。学生に実践させる前に模範的な患者対応と「問題あり」の患者対応を複数パターン準備して撮影・編集したDVDを学生に比較しながら視聴させた後、薬剤師として取るべき態度や問題点についてグループ討論させて、クラス全体で意見交換や議論を行った。その後、新たに作成した「薬局での患者対応」の課題について、背景説明を行ったあと1週間後にロールプレイを実施した。このロールプレイには、患者役としてSPが加わった(Fig. 2)。

成績評価は、各回に課題を設定したミニレポート(400字程度)5回(40%)、WEBコースツール(Web上で教材配布、連絡事項の掲示、小テストの出題、授業の出席管理が行える)への意見等の投稿(200字程度)6回(24%)、2000字の最終レポート(36%)で評価を行った。投稿は、学習を支援するシステムであるWEBコースツールを通じて行い、教員・学生が双方向にコミュニケーションできる形をとった。レポート評価に際しては、到達目標と対応したルーブリックを作成し、評価を実施した。「薬局での患者対応」の技能評価は、学生へのフィードバック等に利用し、成績評価には組み入れなかった。なお、本演習のシラバスについては、本学のホームページ(<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/ac/kyomu/gaku/onlinesyllabus.htm>)において

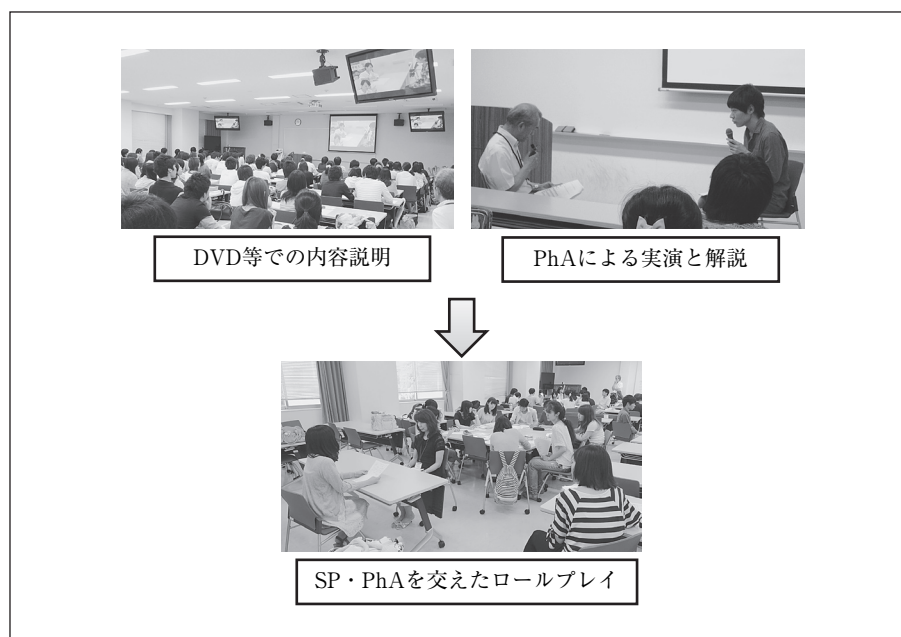


Fig. 2 初回面談・患者対応の演習

閲覧することが可能である。

今回の授業を実施する前に、自己のコミュニケーション能力を評価することを目的として、学生には1回目の授業で「授業実施前アンケート」を5段階評価（5、肯定的から1、否定的）で実施した。また、授業最終回に授業後にアンケートを行い、授業への評価、到達目標の達成度について自己評価を実施した。さらに、薬剤師にとってのコミュニケーションの重要度、授業への6回生のPhA参加やSP参加についての評価を6回生のPhAやSPに求めた。

結果・考察：

1. 授業実施前のアンケート結果

授業実施前に、自己のコミュニケーション能力についての5つの質問に回答を求めた。質問は、①「他人とコミュニケーションを取るのには得意ですか?」、②「人前で発表や話をするのには得意ですか?」、③「他人の考えや話を聴くのは好きですか?」、④「グループでの作業やディスカッションは好きですか?」、⑤「世代や環境の異なる人と話す機会はありますか?」の5項目で実施した。①

については 3.1 ± 1.1 、②については 2.4 ± 1.1 、③については 4.2 ± 0.3 、④については 3.6 ± 1.0 、⑤については、 3.3 ± 1.1 というスコアが得られた。各質問間のスコアに有意な独立性は認められなかった。しかし、回答結果から他人とコミュニケーションを取ることや、人前で発表や話をするることについては、不得手、または抵抗感があることが考えられた。

2. 「薬局での患者対応」の技能評価について

Table 2に示したように、アイコンタクト、話す速度、声の大きさ、傾聴の姿勢、さえぎりの有無、開放型質問の実施に加えて、全体として信頼感・好感をもてましたかという項目を設けて応対技能に関して、学生による相互評価を行った。学生同士がお互いにコミュニケーションの評価の経験が乏しいことを考慮して評価内容を考察しても、アイコンタクト、話す速度に関して概ね評価は高かった。また、事前にDVD等で解説を行っている開放型質問やさえぎりの有無に関しても出来ていと評価されていた。しかし、傾聴に関してはわからないと評価する学生が見受けられた。信頼感・好感に関する評価も前段階の解

Table2 患者応対における評価

各項目の評価			
1. アイコンタクト	☐ されていた	☐ 分からない	☐ されていなかった
2. 話す速度	☐ 適当	☐ やや速い・遅い	☐ 極端に速い・遅い
3. 声の大きさ	☐ 適当	☐ やや小さい・大きい	☐ 極端に大きい・小さい
4. 傾聴の姿勢	☐ 見られた	☐ 分からない	☐ 見られなかった
5. さえぎり	☐ なし	☐ 分からない	☐ あり
6. 開放型質問	☐ した	☐ 分からない	☐ なし
7. 全体として信頼感・好感をもてましたか	☐ はい	☐ まあまあ	☐ いいえ

説等で学習しており、ほぼすべての受講者で「好感が持てる」か「まあまあである」と評価されていた。

3. 授業後の学生アンケート結果について

授業への評価、到達目標の達成度について自己評価、薬剤師にとってのコミュニケーションの重要度、授業への6回生のPhA参加やSP参加についての評価を求めた授業後アンケートの結果を以下に示す。

3-1. 授業への取り組みや有用性について の評価

「あなたはこの授業に積極的に参加できましたか」という設問に回答を求めた。回答は「非常に積極的に参加した」、「積極的に参加した」、「どちらともいえない」、「積極的に参加できなかった」、「全く積極的に参加できなかった」という5つの選択肢から1つを選ぶものとした。その結果は、「非常に積極的に参加した」が40名（38%）、「積極的に参加した」が57名（55%）、「どちらともいえない」が7名（7%）、「積極的に参加できなかった」、「全く積極的に参加できなかった」という回答は見られなかった（Fig.3-A）。次に、「この授業はあなたのコミュニケーション意識や能力の向上に役立ちましたか」という設問に回答を求めた。回答は「大いに役立った」、「役立った」、「よくわからない・どちらともいえない」、「役立たなかった」、「全く役立たなかった」という5つの選択肢から

1つを選ぶものとした。その結果は、「大いに役立った」が66名（63%）、「役立った」が38名（37%）で、「よくわからない・どちらともいえない」、「役立たなかった」、「全く役立たなかった」という回答は見られなかった（Fig.3-B）。以上の結果から、本演習は学生の積極的な参加を促し、コミュニケーションに対する意識の向上に大きく寄与したものと判断できた。

3-2. 授業の到達目標の達成度についての 自己評価

授業の到達目標のうちコミュニケーションに関わる「言語的および非言語的コミュニケーションの方法を概説できる」、「コミュニケーションを円滑にするための話し方・聴き方や文章作成等の基本的な方法を実践できる」および「患者の気持ちに配慮した双方向的なコミュニケーションが行える」の3つの目標の達成度について自己評価を求めた。回答は「達成できた」、「ある程度達成できた」、「あまり達成できなかった」、「全く達成できなかった」、「わからない」という5つの選択肢から1つを選ぶものとした。「言語的および非言語的コミュニケーションの方法を概説できる」という到達目標については、Fig.4に示すように「達成できた」が45名（43%）、「ある程度達成できた」が58名（56%）、「あまり達成できなかった」が1名（1%）、「全く達成できなかった」、「わからない」という回答は見られなかった。「コミュニケーション

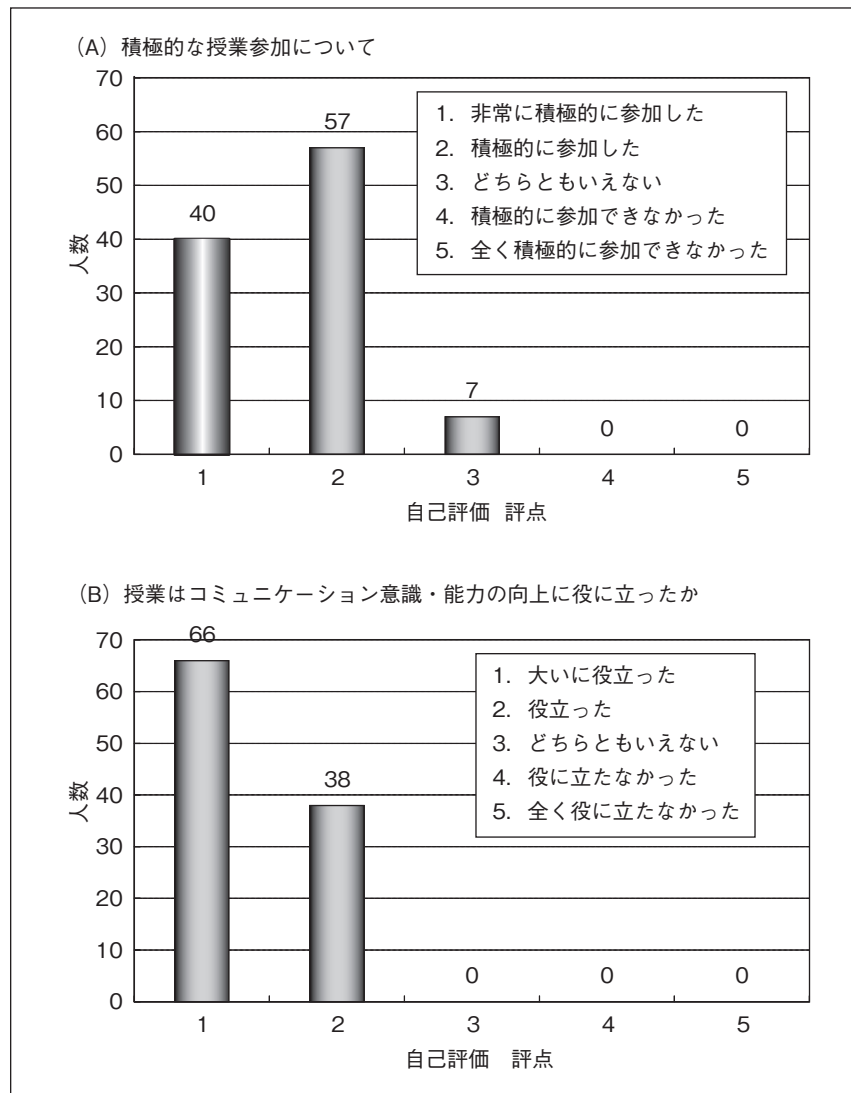


Fig.3 授業後の学生アンケート結果

ンを円滑にするための話し方・聴き方や文章作成等の基本的な方法を実践できる」という到達目標については、「達成できた」が40名(38%)、「ある程度達成できた」が64名(62%)、「あまり達成できなかった」、「全く達成できなかった」、「わからない」という回答は見られなかった。「患者の気持ちに配慮した双方向的なコミュニケーションが行える」という到達目標については、「達成できた」が37名(36%)、「ある程度達成できた」が61名(59%)、「あまり達成できなかった」が5名(5%)、「わからない」が1名(1%)、「全く達成できなかった」という回

答は見られなかった。以上のようにコミュニケーションに関する3つの到達目標について高い自己評価を得ることが出来た。

3-3. 薬剤師にとってのコミュニケーションの重要度についての認識

次に、「薬剤師にとってコミュニケーション力を身につけることは大事だと思いますか」という設問に回答を求めた。また、この質問は受講前と終了後に同じ質問を行い意識の変化も調査した。回答は「大いに思う」、「どちらかというと思う」、「よくわからない」、「どちらかというと思わな

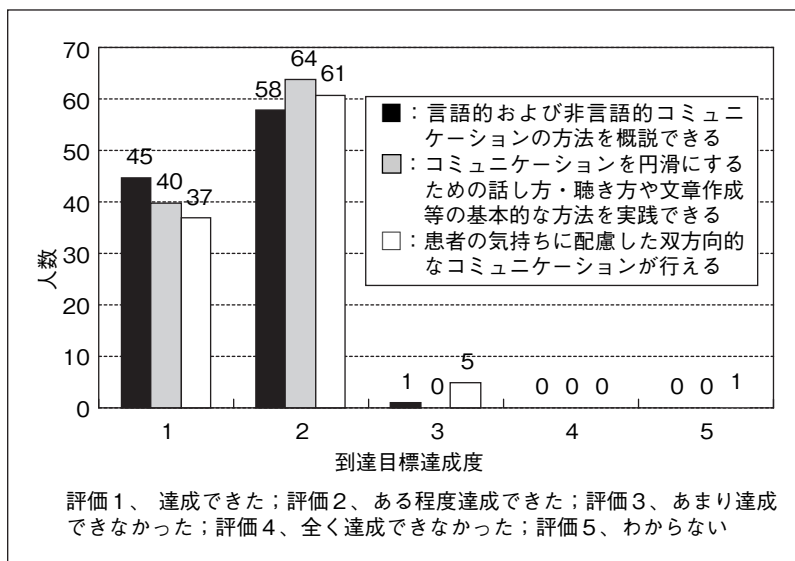


Fig. 4 授業の到達目標の達成度についての自己評価

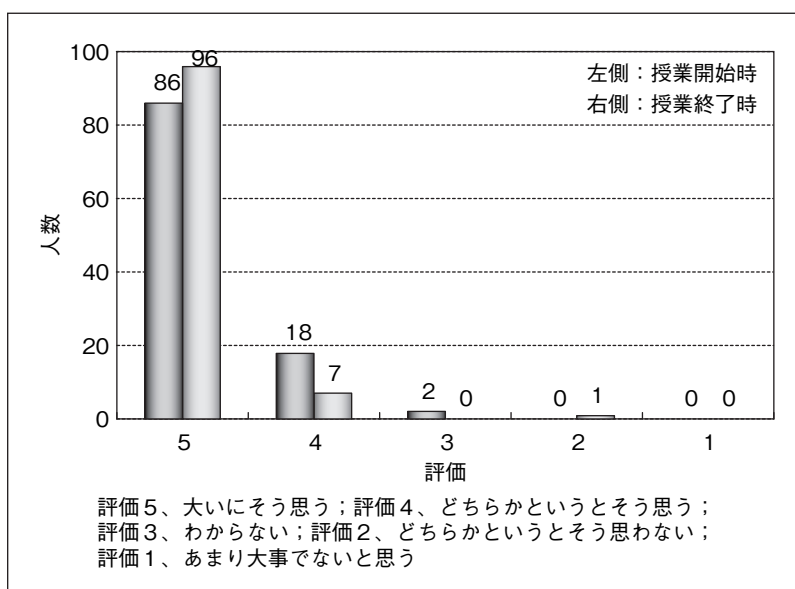


Fig. 5 アンケート「薬剤師にとってコミュニケーション能力を身につけることは必要か」の評価

い」、「あまり大事ではないと思う」、という5つの選択肢から1つを選ぶものとした。その結果は、Fig. 5 に示すように受講前から必要とする意識が高く、授業を通じてさらに「大いにそう思う」が96名（92%）、「どちらかというと思う」が7名（7%）、ほとんどの学生が必要であると感じていると思われた。しかし、受講前には見られなかった「どちらかというと思わない」が1名（1%）増えたことについては今後の検討を必要とす

る課題と思われた。以上のように、薬剤師におけるコミュニケーションの重要性についても意識が深まったことが確認できた。

3-4. 授業への6回生のPhA参加についての評価

今回、6回生の学生（PhA）を授業に加えた。学生に向けて、実務実習での患者対応や服薬指導の体験談を話す機会を設けたほか、SGDではファシリテーターとして議論を見

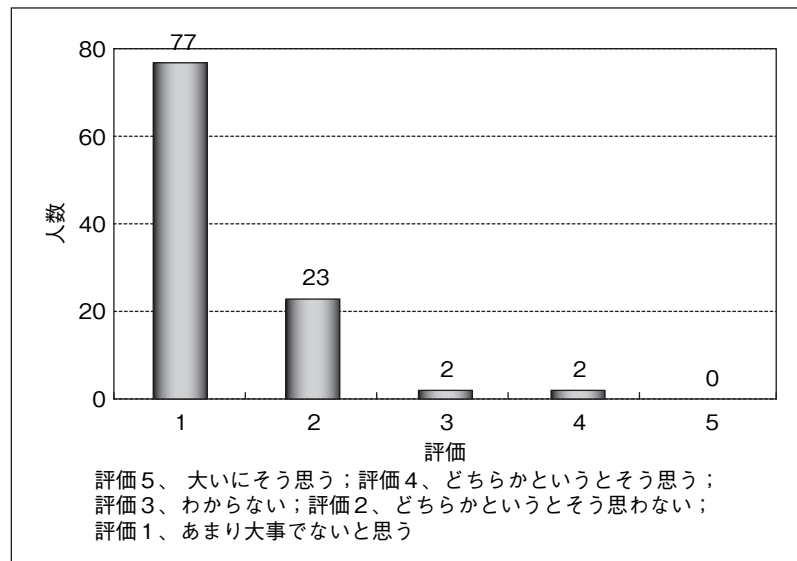


Fig. 6 授業への6回生のPhA参加についての評価

守る役割を、患者対応のロールプレイ（練習）では患者役として加わり、学生のパフォーマンスを評価すると共に、フィードバックを行う役割を依頼した。

アンケートで「薬学部の6回生（PhA）が授業に参加することは授業に良い効果をもたらしましたか」という設問に回答を求めた。5点～1点まで（5点、非常に良い；4点、どちらかというが良い；3点、どちらともいえない；2点、どちらかという良くない；1点、非常に良くない）で回答を求めたところ、Fig. 6のような意見分布となり、平均4.67点となった。具体的な印象や、良かった点、改善を要する点について意見を求めたところ、「先輩との接点が多かった」、「実務実習でコミュニケーションが重要であるという生の体験談が聴けて有益だった」、「自分の将来を考える上で有用な意見やアドバイスを得ることが出来た」、「自分も6回生になった時に後輩の指導が出来るように成りたいと思う」などという記載が見られた。6回生学生のPhAとしての参加は、学生の目標を先輩として見せることが出来るなど、低回生に対して良好な教育効果を得ることが出来ると考えられた。

3-5. 授業へのSP活用についての評価

今回、患者対応の演習（2回）では授業に患者役としてSPが加わり、学生のパフォーマンスを評価すると共に、フィードバックコメントを行った。

アンケートで「模擬患者さんが授業に参加することは授業に良い効果をもたらしましたか」という設問に回答を求めた。5点～1点まで（5点、非常に良い；4点、どちらかというが良い；3点、どちらともいえない；2点、どちらかという良くない；1点、非常に良くない）で回答を求めたところ、Fig. 7のような意見分布となり、平均4.68点となった。「初対面の人との面談にリアリティーがあった」、「友人同士のロールプレイに比べて遥かに緊張感があった」、「懇切で優しいアドバイスを受けることができた」、「学生では気がつかないような視点があった」、「一生懸命やったことに褒められて嬉しかった」などという記載が見られた。コミュニケーション演習へのSPの参加は、学生に対して通常の演習と違う「緊張」のある空間を形成すると共に、馴れ合いによる見落としの指摘や、褒めるといった行為をSPから受けられるため受講学生に対して良い効果が得られていると考

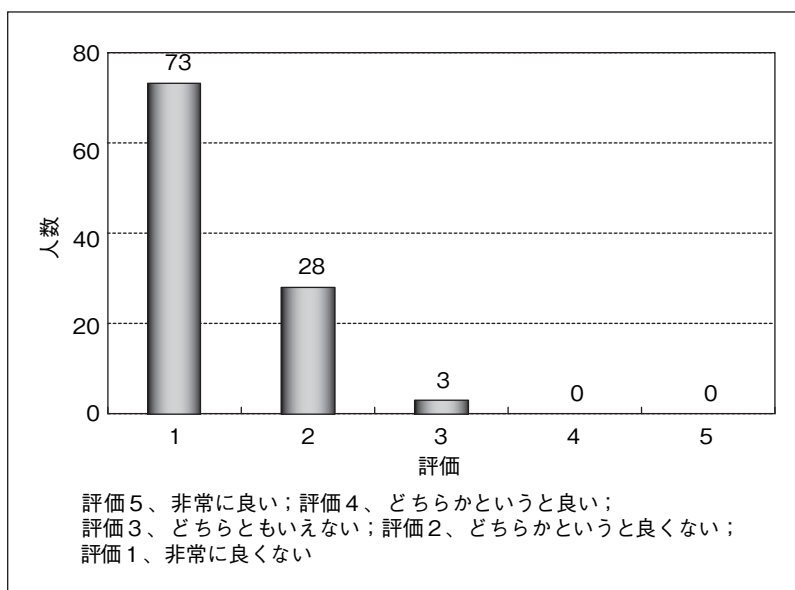


Fig. 7 授業へのSP活用についての評価

えられた。

4. 授業後のSPアンケート結果について

演習の終了後に授業担当教員とSPとの間で交流会を設定し、授業についての意見交換を行った。そこでは、「本大学におけるSPの位置付けが、これまで薬学共用試験（OSCE）への協力・参加のみを前提としたものであったが、今回のような薬学生の授業・演習に直接携われる機会は今後のSPとしてのモチベーションを向上させると共にSPとしての取り組みを考えさせられる機会となった」などの意見が寄せられた。さらに、「SP自身もコミュニケーション学を学生と一緒に学びたい」という意見もあった。また、今夏に実施した交流会では、「SPが参加できる機会が少ない」という意見や、「演習自体の構成、シナリオおよび補助教材であるDVD等に更なる作り込みや内容の適切化が必要である」という意見も寄せられた。SPから上げられた意見は次年度以降の改善や構成の変更に非常に参考になるものであった。

同時にTable 3に示したアンケートを実施し学生に対する印象、薬学教育や薬剤師に対する意識調査を行った。学生に対する印象に

関するアンケート項目で「学生の授業態度にどのような印象を持ちましたか」という設問に回答を5点～1点まで（5点、非常に良い；4点、どちらかというが良い；3点、どちらともいえない；2点、どちらかというと良くない；1点、非常に良くない）で回答を求めたところ、すべてで非常に良い（平均5点）とすべてのSPで好回答が得られた。また、「学生の演技にどのような印象を持たれましたか」を前設問と同様に回答を求めたところ4点以上の回答が得られ、平均点は4.4点であった。「今後もこのような演習に参加したいと思いますか」という設問の結果は、「ぜひ参加したい」、「参加したい」のどちらかの回答が得られ、学生に対するアンケート結果も含めコミュニケーション演習に対する評価が良く、次年度以降に開催する演習へSPの参加が期待できた。

このアンケートでは、演習に参加したことによる薬学教育や薬剤師に対する意識変化を問う設問も行った。「演習に参加して薬学教育や薬剤師は身近なものになりましたか」という設問に対して、「大いに身近になった」または「少し身近になった」の回答がSP全員から得られた。また、「医療人としての薬

Table 3 SPに対するアンケート

1. 学生の授業態度にどのような印象を持たれましたか？
☐非常に良かった ☐どちらかという良かった ☐どちらともいえない
☐どちらかという良くなかった ☐非常に良くなかった
2. 学生の演技にどのような印象を持たれましたか？
☐非常に良かった ☐どちらかという良かった ☐どちらともいえない
☐どちらかという良くなかった ☐非常に良くなかった
3. ご都合が合えば今後もこのような演習に参加したいと思われますか。
☐ぜひ参加したい ☐参加したい ☐よくわからない
☐あまり参加したくない ☐参加したくない
4. 演習に参加して薬学教育や薬剤師は身近なものになりましたか。
☐大いに身近になった ☐少し身近になった ☐あまり身近にならなかった
☐全く身近にならなかった ☐わからない
5. 医療人としての薬剤師を育てるうえでこのような演習をどのように思われますか。
☐大いに有用である ☐どちらかという有用である
☐どちらかという必要ない ☐全く必要ない ☐どちらともいえない
7. その他、ご意見を自由にお書き下さい。

剤師を育てるうえでこのような演習をどのように思われますか」という設問では、「大いに有用」または「どちらかという有用」の回答がSP全員から得られた。薬学教育にSPを活用することは、薬学教育や薬剤師の職能を一般の人々に理解してもらう機会となる点でも重要であると考えられた。

5. 授業後のPhAからの感想・意見

授業に参加したPhAを対象に記述形式のアンケートを実施した。回答が得られた全員から「コミュニケーション演習に機会があれば再度参加したい」という結果が得られた。また、「低回生の時に同様の演習授業を経験しなかった」という意見が多く、低回生で薬剤師の職能においてコミュニケーションの重要性を学ぶ必要があると感じていることが伺われた。さらに、「先輩として低回生コミュニケーション演習に参加することで自分自身のコミュニケーションスキルを見つめ直す機会になった」との意見も見られた。薬学部6回生が演習に参加することは、演習のアシス

タントだけでなく学生自身のコミュニケーションスキルを再確認する場所にもなると思われる。「薬剤師として求められる基本的な資質」の中でも、項目の一つとして「教育能力」が挙げられている。先輩学生（とりわけ実務実習を終えた高回生）の演習への参加は、学生の教育能力の涵養にも繋がると期待される。

結論：

今回、一回生を対象に実施した「ヒューマニズム・コミュニケーション演習」の内容は、教育学や心理学を専門とする教員によるコミュニケーションスキルの演習から、薬学部の特性を考慮した「患者コミュニケーション」の実践までを網羅するものであった。この演習では新たに低回生授業へのSPの参加を試みた。SPの参加は後半の一部のみとなったが、学生のみならずSP、および参加したPhAからも好印象が得られた。

「薬剤師として求められる基本的な資質」の中では、コミュニケーション能力が重要視

されている。薬剤師としてのコミュニケーション能力は、社会における一般的なコミュニケーションを越えた「医療人」としてのコミュニケーション能力を意味する。病院におけるチーム医療だけでなく、地域における在宅看護などにおいても他職種との連携および患者との意思疎通においてコミュニケーション能力は重要である。ヒューマニズム・コミュニケーション演習においてSPを活用することは、患者の気持ちを理解することに役に立つといった報告もある⁴⁾。コミュニケーションの基礎をシミュレーター等で学ぶ試みもされているが⁵⁾、SPやPhAがロールプレイに参加することで、シミュレーターでは作り出せない適度な間合いや緊張感、臨場感を生み出すことが可能である。さらに、人を相手にしたロールプレイにおける達成感は大きく、学生に目標を与えることが出来ると考えられ、今後の医療系実習や実務実習で役立つと思われる。他方で、今回は演習の実施初年度でありいくつかの問題も指摘された。その一つはSPの人数が不足していることである。本学におけるSPの養成は、薬学共用試験の実施を念頭に置いて行われて来たことから、受講学生に対してSPの人数が少ないことが挙げられる。また、SPを活用するシナリオの作り込みをさらに行う必要もあり、それに伴う教材の改良と充実も今後の課題として挙げられた。

薬学教育でコミュニケーション能力の重要性が認知されると共に、現在の若者に不足しがちなコミュニケーション能力を向上させることは一つの大きな課題であり、実務実習においてもSPを活用した学生のコミュニケーション能力の充実が望まれている⁶⁾。この演習が、「相手からの情報を受け止める」、「自分の情報を相手に伝える」および「問題を発見し、理論的に考え、提案する」といったface to faceのコミュニケーションの重要性を学生が知ると共に、興味を持ち自分自身の

能力の向上を図ることを期待したい。

謝辞：本授業をご支援いただきました立命館大学薬学部模擬患者の皆さまに御礼申し上げます。本授業の企画・実施にあたり多方面からご尽力いただきました立命館大学教育開発推進機構の鳥居朋子教授、川那部隆司准教授ならびに立命館大学の川崎那恵さん、山田純子さん、小野勝大さん、河合昭依さんに心より感謝申し上げます。本授業に参画していただきました立命館大学薬学部6回生の新沼悠輔君、上田大介君、坂上重利沙さん、船瀬彩加さん、則定菜津美さん、大西由莉さんに感謝申し上げます

[文献]

- 1) 「薬剤師として求められる基本的な資質」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/47/siryo/_icsFiles/afildfile/2012/06/29/1323085_1.pdf
- 2) 堀部紗世、大西憲明、高良恒史、横山照由、「京都薬科大学大学院におけるコミュニケーション教育：臨床薬学演習への模擬患者の参画とその有用性」, 医療薬学, Vol.30, No.8, 529-535[2004]
- 3) 林 徳治、沖 裕貴編著、「必携！相互理解を深めるコミュニケーション実践学（改訂版）」, 第1版, 株式会社ぎょうせい[2010]
- 4) 毎熊隆誉、島田憲一、小野浩重、江川孝、柴田隆司、西村多美子、塩田澄子、前田純子、五味田 裕、手島大輔、「学生の共感度に及ぼす模擬患者の影響」, 日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会会誌, Vol.11, No.1, 16-23[2013]
- 5) 江川 孝、柴田隆司、谷口律子、石本綾乃、岡松沙哉佳、松田りさ、小野浩重、島田憲一、五味田 裕、「実務実習事前学習における対話型シミュレーターを活用した体系的コミュニケーション演習の構築」, 医療薬学, Vol.36, No.7, 476-485[2010]
- 6) 川添 仁、福岡憲泰、辻 繁子、合田哲子、安西英明、芳地 一、「薬学生満足調査から見えてきた薬剤師教育の不足事項-実務実習事前教育の現状-」, 医療薬学, Vol.35, No.7, 501-508[2009]